

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	宮下 和大
論文題目	朱熹修養論の研究
<p>審査要旨</p> <p>中国南宋の朱熹は、万人が聖人になりうるとし、聖人へ到達するための修養論の完成に力を入れた。この修養論は朱熹の思想の中で重要な位置を占め、朱子学（朱熹の思想）の概説書で、これに触れないものは無いが、正面から網羅的に考究した専著は我が国ではほとんど無いに等しかった。著者はこのテーマに果敢に挑み、その成果が本論文である。</p> <p>朱熹の言う聖人とは、「知」と「行」が一体化して完全に発動する存在である。そこでいかに「知」を完全にし、その結果完全な「行」を実現するかが修養論の重要な課題となる。本論文ではまず第一章で、その「知」の完全化の問題を取り上げる。著者は、朱熹が「知」を一定の領域を持つものとしたうえで、その領域を隅々まで埋め尽くしていくことと、その内容を質的に充実させることを要求していることに注目する。そしてその際に朱熹が問題とするのが「過信」と「疑心」であって、反省の契機を得難いことから前者を特に警戒し、「疑心」の方はそれが頻発する「疑病」への危惧を持ちつつも、「知」の領域に存在する間隙を埋めていく手段として積極的な意味を認めていることを摘出する。なおここで著者は、疑念を疑念として禁欲的に承認する「闕疑」を朱熹が督励したのは、朱熹が体験によって「知」の実効性を検証しようとしていることと関係すると見なす。そして「疑心」の積極的な位置づけは、それを解決していく喜びを含んだ「商量」の強調とつながっているとす。以上のような「知」の完全化へのプロセスの解明は、表層的な「知」から本源的な「知」へといった従来の常套的議論から数歩前進したものとして評価できる。特に、能うる限り「疑心」を起しそれを解決し尽くしていくことで「知」の領域に存在する間隙を塞いでいき、「知」が果たして尽くされているのかを確定する指標を立てることが困難なことから、認識と判断がもたらす実効性から再びその認識と判断そのものを問い直すという朱熹独自の方式を掘り起こしたことは価値がある。また朱熹が「理」に「所以然の故」と「所当然の則」の二面があるとしたのは周知のことであるが、著者はこれが「理」の性格規定の問題以上に修養論の中で大きな意味を持っていたことを指摘する。「所以然の故」には「易ふ可からず」、「所当然の則」には「已む容 [べ] からず」の語が付加されることが多いが、著者はその用例を分析し、両者が極めて近い語感を持っていること、朱熹の言う「物」の「表裏精粗」が「理」自体について言われているのでなく、「知」が深まっていく段階について言われていること、「所以然の故」が「裏」と「精」に、「所当然の則」が「表」と「粗」に対応することなどを一つ一つ考証していく。そしてこれらの考証をふまえたうえで、「所以然の故」と「所当然の則」にまつわる朱熹の言説を朱熹の学説の変化を見据えつつ更に詳細に検討する。そして朱熹が次第に「所以然の故」と「所当然の則」の対置を行わなくなり、「所当然の則」に「已む容らず」を付すのみとなっていたことを指摘し、その理由として「所以然の故」が朱熹の修養論の中では実効性を持ち得なかったことをあぶり出す。これらの検証から、従来世界の構造論の提示と見なされていた朱熹の使用する諸概念や諸テーゼが実は修養論の場での意味を持つものであること、またそれらがこの場でいかなる意味を持っていたかが明らかにされている。</p> <p>第二章は、朱熹の修養論の中核をなす「敬」を取り上げている。このよく知られている修養法は有名なわりには正面から取り組んだ研究に乏しかった。それは朱熹に先行する程顥、程頤兄弟と朱熹との敬の解釈の差が曖昧であること、程頤が唱え朱熹が継承した「主一無適」と「整齐厳肅」という二つの敬の施行方法の関係が説明しづらかったからである。著者は程頤の「敬」の議論を詳細に分析し、「整齐厳肅」→「主一無適」→「閑邪」→「存誠」という外→内→外という連環的修養を程頤が考えていたことを明らかにした。さらに程頤が「主一」を語らなくなっていく理由、「誠」をいかに扱ったかなどの説明もなされる。そ</p>	

れに対して程顥の場合は、程頤の方法が「敬」を意識し続けそれを意識の中に定位させようとするのに対し、現在という瞬時に於いて事物への対応を自然化させるところに特徴があるとする。そのうえで程頤が程顥と自己を同一化させる努力を行って、それが修養論における言説を屈折させていることなど興味深い指摘も行う。また「静坐」も朱熹の修養論として重要なものであるが、著者は程顥に比して程頤が「静坐」を重視しなかったことを確認しながら、朱熹が「静坐」に期待したのは、心の安静化や読書への効果などの実効性であったとする。ところでかかる修養が「未発」、「已発」のいかなる場面に適用されるのかは道学内部の一大問題であって、これについては種々の議論がなされてきた。著者は、程頤が「未発」を除外し、「未発」、「已発」や「動」、「静」に「工夫（修養）」を分化させずに「已発」の世界においてなされるべきこととしたのに対して、朱熹は「未発」、静時の工夫の領域を定め、「存養」、「涵養」を「已発」の「工夫」に優先させるとする。この程頤の修養論について、著者は更に理義の考察・体認を通じて心の本来性が養われると見なされていることを分析する。

終章では、著者は程頤と朱熹を比較し、程頤が「誠」と「邪」を併存不可能なものとして、「邪」を防ぐことによって「誠」を存するようしようとしたが、それに対して朱熹は「敬」によって自然に「邪」が防がれる効果をねらっていると、更に「知」についてもそれを十全に発揮すれば欲望は消去するとして見なす。つまり「居敬」も「致知」もともにその遂行によって欲望が結果的に消えていくとするのである。このように著者は、程頤と朱熹の根本的差異を、前者は間接的に「誠」を実現させようとしたのに対して、後者は人欲を間接的に防ぐ手段として「居敬」や「格物」を提示したことに見るのである。なお最後に著者は朱熹の思想の中核に位置する「理」の解釈についての従来の説の整理を行いながら、心の修養と「理」の概念をどうリンクしうるのかについての展望を記す。

これまでの朱熹修養論の説明は「居敬」、「主一無適」、「整齊嚴肅」、「静坐」といった用語の解説をつなげてすませることが多かったが、著者は朱熹が修養について論じた箇所を丁寧にたどり、その中の核になる部分に考証を加え、朱熹がいかなる修養法を構想し、その意味づけを行っていたかの全貌を立ち上げようとした。また朱熹、程顥、程頤のそれぞれの修養論の特質の抽出と相互の比較も、従来曖昧に放置されていたこの方面に新たな光をあてたものと言えよう。著者はこれらの検討の結果、先に述べたように随所に従来の通念とは異なる見解を提示していて、それらの中には説得力を持つものが多い。ただ程頤や程顥とともに朱熹の修養論の形成に大きな影響を及ぼし、朱熹がその影響から脱却した後も対抗し続けた湖南学の修養論との差異については、論及はあるものの更に踏み込んだ分析が要求されよう。朱熹が「涵養」の重要性を言う時には湖南学の「察識」重視が強く意識されているからである。また著者がキーワードの一つとして使用する「実効性」についても、議論も深める必要がある。もっともこれらは今後の課題とも言えよう。ともかくも本書の公刊によって、学界において議論が呼び起こされ、この方面の研究が新たな展開を見せることが十分期待できる。

以上によって、本論文を博士学位の授与にふさわしいと判断する。

公開審査会開催日	2013年 6月 25日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学・文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	土田 健次郎
審査委員	早稲田大学・文学学術院・教授		森 由利亜
審査委員	明治大学・文学部・教授	博士(文学)早稲田大学	垣内 景子
審査委員			
審査委員			